

国際社会における生命倫理規範は、常に医学研究の公開性・透明性を求めてきた。「ヘルシンキ宣言」（2000年改訂）では、ネガティブな結果も含めて研究結果を公表すべきとされている。

日本学術会議の声明「科学者の行動規範について」（2006年10月）では、科学者に対し自らの研究が「人間、社会、環境に及ぼし得る影響や起こし得る変化を評価し、その結果を中立性・客観性をもって公表する」ことを求めている。

また、厚生労働省「臨床研究に関する倫理指針」（2007年改正）では、実験的要素のある「介入研究」は、公表を前提とするデータベースに登録することを義務づけている。医科学研究者は、そもそも“Publish or Perish”との警句が示すように、研究成果を公表することで学問的業績を積み、国際的な研究者共同体の中で知識の交流を図るものであり、研究の公開性・透明性は、社会が求めるのみならず、研究者自身にとっても研究者生命の維持に必須である。

そして、生命倫理は、社会規範や倫理規範に沿わない研究を抑制し、人体に有害な情報が隠されないよう研究の公開性を求めてきたのである。

ところが、科学研究の中には、一般社会や学術コミュニティでの公表を必ずしも前提としない場合がある。例えば、企業等から秘密保持契約のもとに受託する研究や、世界最高の一部科学者ネットワークでのみ共有される特殊な知識などである。また、国からの直接のミッションとして行われる国家機密の研究もある。すなわ

ち、国家緊急事態への対応のための研究、セキュリティ上の必要性、公衆衛生的な課題などである。

こうした公開性・透明性を前提としない医科学研究は先端技術領域においては

広がりつつある。この場合、技術の社会との接点を見極め、その暴走を制御することはしばしば困難であろう。とくに、医療への展開の期待の大きい生殖発生生物学・胚操作技術、ゲノム生物学・遺伝子解析操作技術、精神科学・高次脳機能解析操作技術の開発研究ではよほど注意しないかぎり、その恐れが大いにある。

近代社会においては、科学者の謙虚さに加えて、その自動制御を可能にする秩序構築と制度設計が今後ますます必要となる所以である。

そのための公理が、研ぎ澄まされた生命倫理の価値判断基準であることは言うに及ばない。

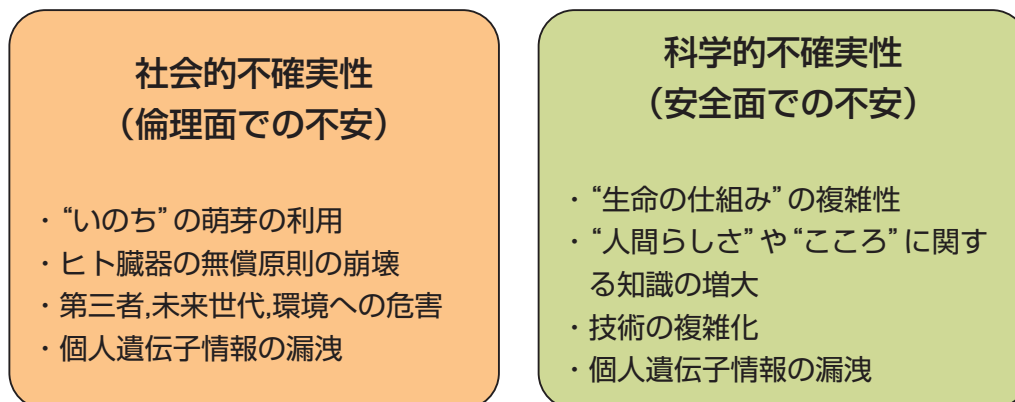
医学研究の公開性と透明性

早稲田大学 理工学術院 特任教授
先端科学・健康医療融合研究機構
生命倫理科学ドメイン主査
東京大学 名誉教授

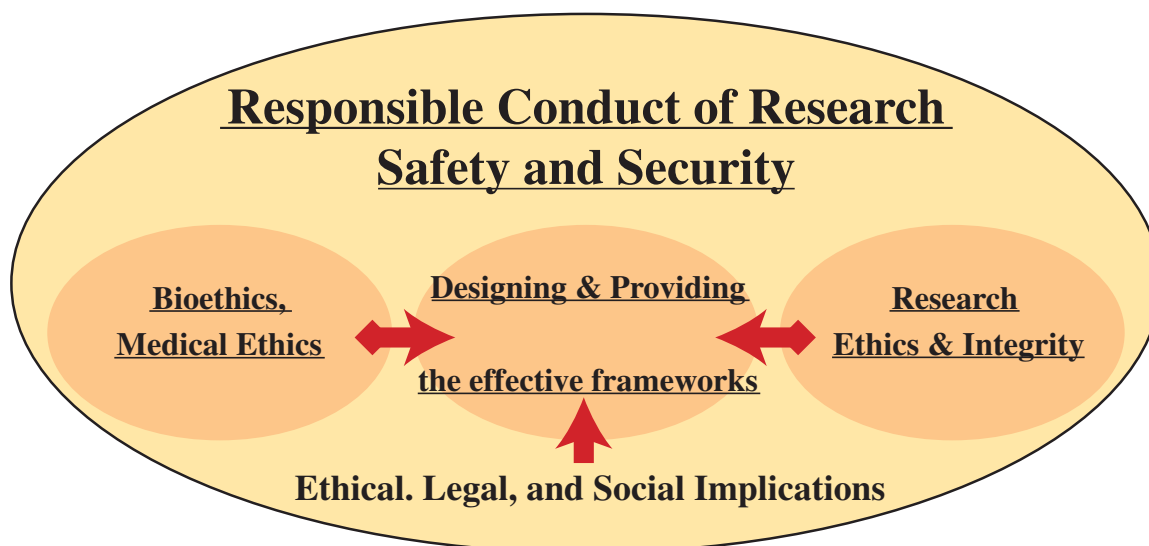
浅野 茂隆

■ ASMeW生命倫理科学ドメイン5年間の軌跡

早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構（ASMeW）生命倫理科学ドメインでは、特に、社会的不確実性（倫理面に關わるもの）と、科学的不確実性（安全や健康リスク面に關わるもの）との構図を念頭に置き、俯瞰的見地からの生命倫理の学問的体系化を期して、現時の先端生命医科学技術の倫理的・法的・社会的影響（ELSI: Ethical, Legal and Social Implications）に着眼した調査・研究、各種教育活動を展開してきた。



現在、国際水準の科学技術に係る研究領域では、「責任ある研究行為」（RCR: Responsible Conduct of Research）が求められ、その教育・調査・監督は大学・研究機関の社会的責務となっている。科学技術は、現在ならびに将来の人々に対して大きな影響を与えるがゆえに、倫理的責任も負うことになるのは、万人が知るところであろう。当ドメインでは、大学や研究機関におけるRCRに関する学内外の動向を注視し、従来の生命・医療倫理に係る知見のみならず、医理工連携領域を見据えた研究の倫理・インテグリティについての研鑽も重ね、生命倫理・研究倫理の諸問題、リスクの管理や安全の確保に係る諸問題について考察を行ってきた。



また、当該領域に係る国内外の関連諸制度について分析し、わが国の大学研究機関を取り巻く、先端生命医科学技術の今日的課題への応用についての考察も行ってきた。なお、当ドメインによって、これまで数多くの国際シンポジウムやセミナー、各種教育・研究活動が展開されてきた。それらの詳細は以下の通りである。

I. ASMeW公開シンポジウム「国際共同研究と倫理」

“Ethics and International Collaborative Research” 開催

2006年7月28日、米国からReidar K. Lie, M.D., Ph.D. (Head, Section on International Research, NIH Dept. of Clinical Bioethics) 氏を招聘し、公開国際シンポジウム「国際共同研究と倫理」を早稲田大学小野記念講堂で開催した。

当日は、Reidar K. Lie氏の講演「Ethics and International Collaborative Research」に続いて、甲斐 克則氏（早稲田大学大学院法務研究科教授）による「Reidar K. Lie 博士の講演に対するコメント」、川名 正敏氏（東京女子医科大学附属青山病院長）による「Multi-center Clinical Trial in Japan」、栗原 千絵子氏（科学技術文明研究所；発表当時）による「Perception of Provisions 29 and 30 of the Declaration of Helsinki in Japan」、斎藤 加代子氏（東京女子医科大学附属遺伝子医療センター所長・教授）による「Bioethics in Clinical Genetics: View Points from Clinical Practice」の発表が行われた。本シンポジウムでは、人を対象とした、とりわけNIHの国際共同研究についての倫理的諸問題について活発な討議が行われた。



II. 早稲田大学創立125周年記念ASMeW国際シンポジウム

「責任ある研究 — 日・米・欧の現状と課題 —」

The Waseda University 125th Anniversary ASMeW International Symposium “Responsible Conduct of Research — Japan, U.S. and European issues and perspectives” 開催

2007年1月13日、早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構 (ASMeW) / 早稲田大学研究推進部主催（日本学術会議共催）により、研究倫理を主題とした国際シンポジウムを、早稲田大学国際会議場井深大記念ホールで開催した。

当日は、「責任ある研究 — 日・米・欧の現状と課題 —」をテーマに、EFGCP (European Forum for Good Clinical Practice) 共同議長のDr. Frank Wells氏、米国保健福祉省ORI (Office of Research Integrity) 局長のDr. Chris B. Pascal氏、米国保健福祉省OHRP (Office for Human Research Protections) 局長代理のDr. Melody Lin氏、ならびに、国内第一線で活躍される先生方を招聘し、当該テーマでは、国内には他に例のない構成の国際シンポジウムとなった。

本シンポジウムは、責任ある研究行為 (RCR: Responsible Conduct of Research) 実践のあり方をめぐって、研究倫理 (Research Ethics) と、研究の廉直・誠実・健全性 (Research Integrity) の双方の観点から、国内外の現状や課題についての講演が行なわれた。パネルディスカッションでは、笠木伸英氏（東京大学大学院工学系研究科教授）、札野順氏（金沢工業大学科学技術応用倫理研究所長、教授）、仁志田博司氏（東京女子医科大学母子総合医療センター所長、教授）、横野恵氏（本学社会科学総合学術院専任講師）の他、講演いただいたDr. Frank Wells氏、Dr. Chris B. Pascal氏、Dr. Melody Lin氏、浅島誠氏（東京大学大学院総合文化研究科教授）にもパネリストとして参加いただき、多様な専門領域を背景とした、質疑応答が活発に繰り広げられた。社会から負託された信頼に応え、責任ある研究行為の実践を目指す大学研究機関にとって時宜を得たものであり、大いなるメリットをもたらした。



Ⅲ. ASMeW特別シンポジウム

『バイオセキュリティ：ライフサイエンスの研究におけるガバナンスのあり方を考える』

ASMeW International Symposium “The Life Sciences, Biosecurity, and Dual Use Research” 開催

2007年3月13日（火）、特別シンポジウム「バイオセキュリティ：ライフサイエンスの研究におけるガバナンスのあり方を考える」をASMeW会議室で開催した。

本シンポジウムでは、生物兵器禁止条約専門家会合の英国政府代表団メンバーであり、英国ロイヤル・ソサエティー（学術会議）にて、ライフサイエンス分野における科学者の行動規範などのガバナンス・ガイドライン策定や軍民両用の汎用研究・技術の漏洩対策の推進などを主導する、バイオセキュリティの世界的権威の、マルコム・ダンドー氏（英国ブラッドフォード大学 国際安全保障学部 教授）とブライアン・ラパート氏（英国エクセター大学 社会・哲学学部 科学技術公共政策学科准教授）の講演と共に、浅島誠氏（東京大学大学院総合文化研究科教授、日本学術会議 科学者の行動規範に関する検討委員会委員長）の特別講演『わが国におけるバイオセキュリティの取り組み』等、国内の有識者らによる講演が行われた。当日の様子は、NHKBSでも紹介された。



Ⅳ. ASMeW第1回国際エシックス・セミナー

「ナノテクノロジーの倫理的・社会的影響と国際的展望 —」

The 1st ASMeW International Ethics Seminar “Ethical and Social Implications of Nanotechnology: the International Perspectives” 開催

2007年10月5日、ジャン＝ピエール・デュプイ教授（エコール・ポリテクニック、兼・スタンフォード大学）、大林雅之教授（京都工芸繊維大学大学院）、関谷瑞木氏（産総研 技術情報部門ナノテクノロジー戦略ワーキンググループ）、柳下皓男氏（ナノテクノロジービジネス推進協議会事務局長代理【現在は、JFEテクノリサーチ株式会社にご所属】）を招いて、「第1回国際エシックス・セミナー」をASMeW会議室で開催した。

当日の特別講演では、ジャン＝ピエール・デュプイ教授（エコール・ポリテクニック、兼・スタンフォード大学）から、原子的・分子的スケールで制御しうる「ナノテクノロジー」によってもたらされる自然の人工化—人間の精神、身体をも含む、全てのものについて工学的に改変しうる可能性、さらに、人間に生じうる倫理の衰退などに関する様々な議論の吟味を通して、深い洞察に基づく人文・社会科学的アプローチが展開された。

なお、同講演は、2004年にEUの高度専門家グループによって報告されたナノテクノロジー、情報通信技術、バイオテクノロジー、認知科学（NIBC；Nano, Info, Bio, and Cogno）技術の収斂（convergence）の諸問題にも深く関わる考察を多く含み、国際社会の動向を視野に入れた非常に時宜を得たものであった。広範な領域への応用可能性を有する「ナノテクノロジー」の技術評価や規制、環境への影響、コスト・ベネフィットの問題のみならず、その倫理的側面についても焦点をあてるかたちで提起された諸問題は、当セミナー参加者にとっても、大変示唆に富むものであった。



V. ASMeW第2回国際エシックス・セミナー

「科学の破壊的利用防止のための研究倫理：その実践に向けて」

The 2nd ASMeW International Ethics Seminar “Promoting Research Ethics: From a Web to Practice in Preventing the Destructive Application of Science” 開催

2008年2月4日、ライフサイエンスをめぐる新たな研究倫理の課題として国際的に注視される「科学の破壊的利用防止のための研究倫理」の諸問題について、バイオセーフティやバイオセキュリティ、デュアルユース、科学技術の情報漏洩に関するポイントも含めて、国際セミナーが開催された。

当日は、マルコム・ダンドー氏（英国ブラッドフォード大学 国際安全保障学部 教授）とブライアン・ラパート氏（英国エクセター大学 社会・哲学学部 科学技術公共政策学科准教授）、ナンシー・コーネル氏（ニュージャージー医科歯科大学（UMDNJ）メディカルスクール研究副部長、教授／米国立科学アカデミー(NAS)「科学の進展及び次世代型生物剤の軍事応用防止のための委員会」メンバー）による講演が行われ、（独）科学技術振興機構社会技術研究開発センターの古川勝久氏（主任研究員）と小谷瑠以氏（同アソシエイトフェロー）からも、わが国における取り組みについての解説いただいた。

今般、経済産業省が大量破壊兵器などの開発に結びつく技術の不用意な海外流出を防止するため、大学や研究機関向けに技術管理ガイダンスを作成するなど、関係各方面より大学側の技術管理に対する意識の向上が強く求められ中、当セミナーを通じて、当該領域が直面している最先端のガバナンスと倫理の問題状況について把握し、国際社会の負託に応えうる産学共同研究や国際共同研究の展開に寄与しうる機会となった。

VI. ASMeW / G-COE「実践的化学知」公開シンポジウム（於・TWIns）

「脳神経科学と倫理」ASMeW - Global COE for Practical Chemical Wisdom, Waseda University Symposium “Neuroscience and Ethics” 開催

2008年7月30日、東京女子医科大学・早稲田大学連携先端生命医科学研究教育施設（TWIns）3Fセミナー室で、ASMeW公開シンポジウム『脳神経科学と倫理』が開催された。本シンポジウムは「若手研究者らの取り組む医理工連携研究と脳神経科学研究との接点にある倫理的・社会的問題について」という趣旨で企画されたものであった。

当日は、菱山豊氏（文部科学省ライフサイエンス課長、早稲田大学客員教授）よりオープニング・スピーチとして脳神経科学の倫理と政策についての講演後、当該テーマの第一人者である福土珠美氏（独立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター【※本年4月1日からは、同機構の研究開発戦略センター フェローにご着任予定】）から「脳科学の多様性と可能性」について講演が行われた。同講演では、ニューロエシックス成立後の学問体系化と内外の政策対応の現状についての解説とともに、わが国における「脳-機械インターフェイス」をめぐる最新の動向についての詳細な紹介も行われた。さらに、実際に脳神経科学に係る研究を展開中の澤村直哉氏（ASMeW分子医療ドメイン）より「統合失調症候補遺伝子産物の解析からの病態メカニズムへのアプローチ」、井澤修平氏（ASMeW健



康医療ドメイン)より「パニック障害治療における精神療法の役割」、マッシミリアーノ・ゼッカ氏(ASMeW医療ロボティクスドメイン)より「Neuroscience and Robotics: Ethical and Social Implications」と題する講演が行われた。後半のパネルディスカッションでは、科学哲学・科学技術社会論等の領域において国際的にも活躍される石原孝二氏(東京大学大学院総合文化研究科准教授)をゲストパネリストとしてお招きし、参加者とともに、質疑応答も含めて活発な議論が行われた。最後に、本シンポジウムの総括と展望として、浅野茂隆特任教授(理工学術院先進理工学部、ASMeW生命倫理科学ドメイン主査、東京大学名誉教授)より示唆に富む講演が行われた。

■ 都立戸山高等学校SSH特別授業協力

ASMeW生命倫理科学ドメインでは、文部科学省Super Science High school(SSH)指定校である都立戸山高等学校の特別授業 ― 同校<SSH論文講座>(選択・学校設定科目2単位)の一環として、同校3年生の生徒を対象として、「生命倫理」(研究倫理の話題を含む)の授業を行ってきた。本授業を通して、主体的な問題提起と思考、他者との対話を含む自己表現のあり方、論理的かつ客観的な問題点の整理、その分析と考察、さらに、適切な結論や合意の導き方について学習する充実した時間を生徒たちと共有することができた。



■ 研究倫理セミナー開催協力

2008年2月29日、当ドメインの協力により、早稲田大学グローバルCOEプログラム「実践的化学知」教育研究拠点の「研究倫理セミナー」が、研究倫理入門セミナーという位置づけで、早稲田大学大久保キャンパス62号館大会議室で開催された。

当日は、朝日透氏(理工学術院教授、ASMeW事務局幹事)の進行で、河原直人氏(ASMeW生命倫理科学ドメイン)、横野恵氏(本学社会科学総合学術院専任講師、ASMeW生命倫理科学ドメイン)、中村征樹氏(大阪大学 大学教育実践センター 教育実践研究部 教育評価部門准教授)、大須賀 壮氏(独立行政法人理化学研究所・研究プライオリティー会議)によって、Research EthicsやResearch Integrityに関する基本事項、倫理審査の概要と意義、今般取り組みが進められているResearch Integrityの紹介などが行われ、本学の理工系学生らを対象として、生命倫理・研究倫理の多角的な議論の場が提供された。



また、2009年3月16日には、上記「研究倫理セミナー」の応用編として、独自の質問票を用いたディスカッション中心の講義が行われた。最初に河原直人氏(ASMeW生命倫理科学ドメイン准教授)からガイダンス(1)が行われ、研究の不正行為の代表的な問題であるFalsification(捏造)、Fabrication(改ざん)、Plagiarism(剽せつ)をめぐる基本事項、そして、研究上のデータ解釈のあり方や、成果の出し方をめぐっ

て不正行為に至らないまでも起こりうる、様々な＜疑わしい研究行為＞（QRP：Questionable Research Practices）に関する問題状況についての解説が行われた。

**グローバルCOEプログラム実践的の化学知教育研究拠点
第2回研究倫理セミナー 2009年3月16日**

13:00-13:05	開会挨拶 朝日 透（理工学術院教授/ASMeW事務局幹事）
13:05-13:20	ガイダンス1 河原直人（ASMeW生命倫理科学ドメイン准教授）
13:20-13:35	ガイダンス2 横野 恵（早稲田大学社会科学総合学術院専任講師,ASMeW）
14:25-15:05	ディスカッション 河原直人（ASMeW生命倫理科学ドメイン准教授） 横野 恵（早稲田大学社会科学総合学術院専任講師,ASMeW） 中村征樹（大阪大学 大学教育実践センター教育実践研究部 教育評価部門准教授）
14:30-14:55	ゲスト講演 中村征樹（大阪大学 大学教育実践センター教育実践研究部 教育評価部門准教授）
14:55-15:00	開会の辞 朝日 透（理工学術院教授/ASMeW事務局幹事）

ここでは、本年2月3日に本学学術研究倫理委員会主催（本学研究推進部共催）によるDr. Nicholas H. Steneck先生のご講演「研究の誠実・正確・効率・客観性を育成する — 大学の役割 —（Fostering Honesty, Accuracy, Efficiency and Objectivity in Research）」をふまえ、Brian C. Martinsonらの論文“Scientists behaving badly”※が取り上げられた。

また、研究者が「等身大の目線」で、日常自らが関わる実験「現場」を考察し、その延長線上にある工学技術による製品開発のありようを見据えつつ、「自らで考え、想像力を豊かにして仲間と議論を重ね、実践していく」態度を重視すべきことが述べられた。そして、その「倫理」についてどのように考えていくべきかという問いかけもなされた。

これは、従前の生命・医療倫理の枠組みにあるアプローチで実験者の行為を捉えて考察しようとする発想のみならず、技術倫理・工学倫理などの他の関連学問領域との融合をも視野に入れた倫理観を訴えるものであった。当然、技術倫理・工学倫理などの学問領域にも、それらの研究者らによって永年、脈々と培われてきた「知」の宝の山があり、生命・医療倫理領域にも通底する多くの知見があるはずだからである。



次に、横野恵氏（本学社会科学総合学術院専任講師，ASMeW生命倫理科学ドメイン）によるガイダンス(2)では、「責任ある研究の実施」についてのお話から始まった。ここでは、「研究者に求められる倫理的な行動とは何か」という問いをめぐって、責任ある研究 — RCR (Responsible Conduct of Research) の内容について詳しく説明いただいた。

特に、(人を対象とした)研究の倫理性、生命倫理の観点から見た研究倫理、被験者の尊厳・権利の尊重に根ざした「Research Ethics」、研究の誠実性・公正性、プロフェッションとしての研究者の倫理、ミスコンダクトのない研究等に係る「Research Integrity」、これら両者が補完的であるべきことについて、世

界医師会の「ヘルシンキ宣言」、日本学会議の「科学者の行動規範」もふまえながら詳説いただいた。続いて、RCRに関する国内の状況、本学の状況についても紹介いただき、米国保健福祉省 (Department of Health and Human Services:DHHS) の the Commission on Research Integrity (1995) を取り上げつつ、ルールよりも環境が重要であるということについてお話いただいた。

今回のセミナーの主眼であるディスカッションのセッションでは、その冒頭で「早稲田大学理工学術院倫理宣言」と「早稲田大学理工学術院倫理綱領」(<http://www.sci.waseda.ac.jp/ethics/outline.html>) が取り上げられた。併せて、昨今の研究倫理関連のニュースから考えられることについても尋ねられ、学生たちの問題意識の喚起が行われた。続いて、研究デザイン、人を対象とする研究、データの取り扱い方、論文のまとめ方や発表のあり方、研究費の諸問題、研究室での人間関係といった事項について、各々の体験談や関心事をふまえつつ、河原氏、横野氏、中村氏も交えた活発な討議が展開された。特に、サラム論文のグレーゾーンをめぐる問題、個人情報や知的財産権の保護をめぐる対応について有意義な議論が展開された。また、「人を対象とする研究」についての議論からも、今は自分自身に関わりはないと思っていたとしても、無関心でいられないことなど、学生たちにとって重要な発見があったように見受けられた。

今回は、参加者のほぼ全員を一人一人巻き込んだディスカッションが実現し、前回の基礎編にもまして、インタラクティブな場面を実現させることができた。最後に、ゲストの中村征樹氏 (大阪大学 大学教育実践センター 教育実践研究部 教育評価部門准教授) から講評が行われたが、一流の科学者になるために、今回のセミナーで取り上げられた諸問題を考えていくことが如何に重要であるかということ、学生たちに親しみをこめて分かりやすくお話いただいた。また、閉会の辞では、朝日透氏 (本学理工学術院教授/ASMeW事務局幹事) から、ご自身の体験談や昨今の研究環境をめぐる印象をふまえながら、学生たちに熱をこめて分かりやすくお話いただいた。

なお、今回は当日までに場面ごとに問題を整理した質問票を学生たちに配布し、ある程度まで考えておいてもらう手法をとった。現在、当日のディスカッションで演者らと学生たちとの間でやり取りされた内容を分析・考察を行っているところであるが、引き続き、質問票の改訂等も含めて効果的な教育方法を考えていきたい。

※ Brian C. Martinson, Melissa S. Anderson & Raymond de Vries, “Scientists behaving badly”, *Nature* 435, 737-738 (9 June 2005) | doi:10.1038/435737a; Published online 8 June 2005, (<http://www.nature.com/nature/journal/v435/n7043/full/435737a.html>)

以上、ASMeW生命倫理科学ドメインによる一連の集会を通して、豊富な知見、各種の教育ノウハウが蓄積されてきた。なお、本学の学生を対象とした『生命科学の全体像と生命倫理』(理工学部化学科、平成16年度より開始、大学院・学部合併科目：担当 浅野茂隆)、『生命と研究倫理』(教育学部、平成17年度後期より開始)、『生命理工倫理論』(生命理工 大学院科目、分担講義：浅野 茂隆) の開催、一方で、研究者を対象とした『ASMeW研究倫理講習会』(平成18年度全3回) も開催された。さらに、一般市民を対象とした教育活動としては、早稲田大学エクステンションセンター『安全と信頼の社会システム “いのち” の尊厳』(公開講座；平成17年度後期より開始) の開催も実現した。これらの取り組みから得られた知見により、学内の研究倫理審査体制の整備はもとより、関連研究グループの諸活動に貢献することができた。今後も、これまでの成果の利活用によって、次世代の関連領域の教育・研究開発がいつそう促進されていくことが期待される。

■ 生命倫理科学ドメイン刊行の教育コンテンツ

生命倫理科学ドメイン(ASMeW教育ドメイン)は、生命科学・技術に関連する研究の方向性について、倫理的、法的、社会的な観点から各種の調査研究を行うとともに、一般市民・学生・研究者を対象とした講義、国際シンポジウムなどを開催してまいりました。当ドメインは、これらの成果を社会全体に幅広くお伝えしていくため、独自のジャーナル(紀要・講演録集)やニュースレターを刊行しております。

新年度に伴い学内諸制度は変わりますが、今後も刊行は継続予定です。こうした情報発信の態度を維持させつつ、生命倫理の学問的体系化のためのさまざまな取り組みを引き続き進めていく所存です。

vol.6 (2008年10月)

特集：ASMeW公開シンポジウム「脳神経科学と倫理」開催

- 米国ジョージタウン大学シンポジウム「ナノテクノロジー、倫理、環境保健」参会報告
- ASMeW International Symposium (August 27 and 28, 2008) Poster Session 参加
- 2008年8月下旬以降、研鑽のため参加したセミナー・会合等

vol.5 (2008年07月)

- ASMeW第2回国際エシックス・セミナー開催
- 研究倫理セミナー開催協力
- 都立戸山高等学校SSH特別授業協力

《新刊紹介》木村利人/掛江直子/河原直人/編著『いのちのバイオエシックス環境・こども・生死の決断』(コロナ社, 2008年7月)

- 2008年1月下旬以降、研鑽のため参加したセミナー・会合等

vol.4 (2008年01月)

第6回社会技術フォーラム《特別寄稿》第6回社会技術フォーラム

『ライフサイエンスの倫理とガバナンス』— 社会と協働する科学技術を目指して — 開催報告

- ASMeW第1回国際エシックス・セミナー開催
- ASMeW出張報告(当ドメイン業務に関連して研鑽のため参加した、主なセミナー・会合等)

vol.3 (2007年09月)

ASMeW公開セミナー開催

《特別寄稿》科学技術社会論学会2007年初夏シンポジウム「科学研究における「不正」の構造」

《6月13日開催ASMeW公開セミナー報告—特別寄稿》

<関連セミナー報告など>

- 都立戸山高等学校SSH特別授業協力

vol.2 (2007年04月)

生命倫理科学ドメイン—これまでの活動と成果

- I. 学内研究倫理審査体制整備のための支援 — ASMeW生命倫理科学ドメイン内RI、RCR研究会活動等
- II. 生命倫理教育の実践
- III. 今後の取り組み

vol.1 (2005年10月)

理念と目標

- I. 学内倫理審査体制の支援
- II. 社会工学的研究の遂行
- III. 細胞社会学的研究の遂行
- IV. 安全・倫理観普及教育の実践



早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構 (ASMeW) 生命倫理科学ドメイン発刊

『生命倫理科学ニュースレター』(編集長：浅野茂隆主査) バックナンバーは、

下記URLからダウンロードできます。

生命倫理科学ニュースレター：<http://www.waseda.jp/scoe/bioethics/news.html>

■ 奈良県立医科大学「地域医療教育フォーラム」報告

2008年12月の「早稲田大学—奈良県立医科大学連携協力に関する協定」の一環で、本年3月14日「地域医療教育フォーラム」が開催されました。当日は、当ドメインの河原准教授が演者およびディスカッサントとして参加。同大学の吉岡学長先生はじめ、地域医療にかかわる医師、教員・研究者、行政関係者、学生等、多くの参加者を得て盛会のうちに終えることができました。地域基盤型教育をキーワードとして、地域医療におけるプロフェッショナリズム、人材育成やITに係る諸問題、多業種協働による地域貢献の課題と展望等、多角的な議論が活発に行われ、今後、本学との連携協力に係る様々な活動の布石になったと思います。今後もこうした活動がいつそう活性化していくことを願っております。

日時：平成21年3月14日午後2時開演 場所：万葉ホール

フォーラム次第

午後2時～2時5分

開会挨拶 学長 吉岡 章

第一部：講演 座長 藤本真一

(奈良県立医科大学総合医療学、教育開発センター、地域基盤型医療教育セクション)

午後2時05分～2時55分

講演1. 「札幌医科大学における地域医療教育の現状」

札幌医科大学 地域医療総合医学講座 准教授 宮田靖志

午後2時55分～3時25分

講演2. 「地域枠学生教育の取り組み」

午後3時25分～午後4時15分

講演2. 「地域病院の再生と地域医療教育」

松前町立松前病院院長 木村真司

休憩

午後4時20分～午後5時10分

講演3. 「地域医療と医師のプロフェッショナリズム」

早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構 生命医療工学研究所

准教授 河原直人

休憩 (午後5時10分～5時15分)

午後5時15分～午後5時45分

第二部：総合討論 「地域医療教育の現状と展望」

座長

森田孝夫 (奈良県立医科大学 教育開発センター)

藤本真一

(奈良県立医科大学 総合医療学、教育開発センター、地域基盤型医療教育セクション)

ディスカッサント：

札幌医科大学 地域医療総合医学講座

准教授 宮田靖志、助教 夏目寿彦

松前町立松前病院

院長 木村真司

早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構 生命医療工学研究所

准教授 河原直人

午後5時45分

閉会 森田孝夫 (奈良県立医科大学、教育開発センター)



日本生命倫理学会 第21回年次大会のお知らせ

「バイオエシックスを未来に」(予定)

2009年11月14日(土)・15日(日) 於・東洋英和女学院大学横浜キャンパス

大会長：大林雅之(東洋英和女学院大学)

大会実行委員長：河原直人(早稲田大学) 大会事務局長：川上祐美(早稲田大学)

詳細は後日、同学会のHP (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jab2/>) からのリンクで公開予定です。

編集後記

これまでASMeW生命倫理科学ドメインの活動を展開してまいることができましたのも、当ドメインにご理解を賜り、支えて下さったすべての先生方のおかげであります。心から感謝申し上げます次第です。当ニュースレターは可能なかぎり今後も継続してまいりたいと存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。(河原)

編集長：浅野茂隆(生命倫理科学ドメイン主査)

発行：2009年3月19日

連絡先：〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513 早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構

Tel：03-5272-1206/Fax：03-5272-1208 (本文文責・編集担当：河原直人)

印刷：コロニー東村山印刷所 〒189-0001 東村山市秋津町2-22-9

Tel：042-394-1113/Fax：042-394-1052



振興調整費